

<原著>

大学生における日常的出来事とパーソナリティが むなしさに及ぼす影響

池邑榛香 信州大学大学院教育学研究科
水口 崇 信州大学学術研究院教育学系

概要

本研究では、むなしさと関連するパーソナリティの特徴、及び出来事に対する評価とパーソナリティの関連、出来事の中で生起するむなしさを検証した。大学生148名を対象に空虚感尺度、大学生用日常的出来事尺度、Big Five 尺度短縮版を用いた質問紙調査を実施した。結果、充実感・満足感が低く不安が高い状態はむなしさが高いことが検出された。情緒不安定性がむなしさと関連の高いパーソナリティであると推測された。パーソナリティと出来事の関連も示された。自己に対するポジティブな出来事には、充実感・満足感が影響していることも示された。

キーワード：むなしさ、Big Five、抑うつと不安、日常的出来事

問題と目的

私たちは、日常の中で様々な感情が喚起される。その中の一つに「むなしさ」がある。形容詞的な「むなし」は広辞苑第六版によると、「1.中に物が無い。からである。」「2.内容がない。充実していない。」「3. 事実がない。あとかたがない。」「4.はかない。かりそめである。」「5.この世にいない。死んだ。」「6.無益である。無駄である。かいたがない。」「7.欲がない。恬淡である。」である。このように「むなしさ」の意味は多岐にわたっており、類語は「はかない」、「空虚」、「無常」などがあげられる。その概念は禅などといった仏教的な無常観と結びついて、日本に根付いてきたと考えられる。

「むなしさ」の一般的な英訳語として *emptiness* があげられる。Hazell(1984a)によると、*emptiness* は芸術的、哲学的、神学的、心理学的な概念であると述べている。北山(1992)は、むなしさの防衛の方法として、何かで埋めてむなしさを充実に変換するやり方が代表的であると述べている。また、むなしさが病的な抑うつを考えるための手がかりとして貴重な物であり、病的な抑うつは自身がむなしさに圧倒されるという。外界の取り返しのつかない喪失の取り返しのつかない喪失に転嫁しやすく、そのむなしさの病的な抑うつ

つ化を促進するのが、喪失対象に対する怒りや恨みの感情である。その感情が自己へと向け替えられ、自己評価の低下や自責の念につながる場合があるとしている。加えて、喪失が急であり、喪失対象の「身代わり」が発見されない場合、なくなった対象の後を埋めるために自分が身代わりになって自らを消耗しさらに病的な状態に陥っていくこともあると述べている。

心理学の分野において、「むなしさ」を空虚感、無力感と並べて論じていたり、ほぼ同じ概念ととらえて研究していたりするものも多くある(大上, 2013)。まず、むなしさについて、空虚感、無力感を含め研究について概観する。

これまでに海外では、精神医学的・心理学的な切り口からむなしさに関する研究がなされている(大上, 2013)。Hazell(1984a, 1984b)は、emptiness を内的空洞感、漠然とした情動的麻痺感、自己喪失感の3要素からなるものとみなし、emptiness の経験は、正常な情報発達過程上必須の1つの危機経験として積極的な意味を持つことを強調している。また、emptiness の経験が抑うつと高い相関があることがわかっている。Jeanette and Mark(2007)は、非臨床サンプルの大学生を対象に、境界性パーソナリティ障害の特徴を検討している。その結果、3つの要素が見いだされ、そのうちの1つに慢性的な空虚さを特徴としていることが分かった。また、DSM-5において境界性パーソナリティ障害の診断基準のなかに「慢性的な空虚感」が含まれていることから、境界性パーソナリティ障害との関連が大きいと考えられる。

また、国内においては摂食障害との関連の研究が行われており、摂食障害患者は無力感、絶望感を抱いており、体型・体重をコントロールして達成感を得たいと考えることが示唆されている(太田垣・米澤・志和・斎藤・中村, 2005)。馬場・菅原(2000)によると、女子青年を対象として、自尊感情の低さや空虚感が体型への不満へとつながり、痩せたいという気持ちを高めると述べている。つまり、空虚感を長期的に抱くことで、痩せたいという気持ちが高まり、摂食障害へとつながる可能性が考えられる。堤(1994)は、むなしさ尺度を作成し、無目的感、孤独感、否定的自己感の3因子を見出した。加えて、むなしさが単なる充実感のなさを意味するものではなく、より積極的な自己確立への希求性を秘めていると述べており、いずれの因子も中学、高校、大学と進むにつれて低下していく傾向にある。また、社会的逸脱行為傾向と空虚感との関連を研究したものもあり、空虚感が認知的歪曲を介して間接的に社会的逸脱行為に影響を与えるだけでなく、直接的にも影響を与えることが見いだされている(高橋・大野・境, 2010)。加えて、空虚感是自己自身のみの問題ではなく、親との心理的距離が青年期後期まで影響を及ぼしている(徳本, 2001)。

このように、精神医学的、発達の観点からむなしさに関する研究はされてきている。しかしながら、むなしさとパーソナリティとの関連に着目した研究はなく、むなしさがどのような性格特性をもっているのかということについては検討がなされていない。また、むなしさの概念もはっきりとしていないのが現状である。本研究では、むなしさを

Hazell(1984a, 1984b)にならい、「人生に目的や目標を見出せず、自己像が不確実になっている感覚」と定義することにし、パーソナリティとの関連を検討することを目的とする。

むなしさ、空虚感を感じる場面として対象喪失があげられる。震災などによって家や街といった物的所有物や、自信ややる気といった精神的自己の喪失から回復に至るまでの過程に、空虚や無気力を感じることを示されている(池内・藤原, 2009)。しかしながら、大上(2015)において、前期高齢者にむなしさの生起について質的な調査を行った結果、生起場面として「生きがいの探索」「親子関係の変化」「社会・制度の中で立ち回る」があげられている。これまでの研究から、対象喪失以外の日常場面や発達段階の変化、ライフイベントなどによりむなしさを感じる可能性が考えられる。

白井・鈴木(2016)では、6種類の悲しみ喚起場面における悲しみの特徴の違いを研究しており、生起から1週間後も悲しみが持続するものと、時間経過とともに悲しみが減少するものの2種類が示された。悲しみの中でも、無力感においては、目標、死別、恋愛、怪我、孤独の場面において生起1週間後も同程度の悲しみが持続していた。中でも死別は、時間的経過に伴い減少がみられるものの、無力感を高く維持していた。つまり、一度抱いた無力感は長く持続するのではないかと考えられる。また、門田・寺崎(2009)は、パーソナリティと、日常的出来事の快不快の評定との関連を見出し、外向的な人ほど対人的な出来事をより快と評価し、神経症的傾向が高いほど仕事や学業上の行き詰まりをより多く体験し、否定的感情を高めることが分かっている。このように、パーソナリティによっても出来事の評価が変わることが推察され、本研究においても、パーソナリティによって出来事の評価が関係しているのかを検討する。また、本研究において、日常場面において「むなしさ」が高まる場面の検討も加えて行う。

本研究では、第1に、パーソナリティとの関連を検討する。むなしさは、現時点ではその実在を含めて、ほぼ手付かずの状態にある。そこで、むなしさと関連するパーソナリティの特徴について分析を行う。第2に、出来事に対する評価とパーソナリティの関連を網羅的に明らかにする。先行研究の中で、パーソナリティの一部との関連を検討したものがある。ただし、Big Fiveのようなパーソナリティを網羅したものと出来事の関係を検討したものはない。そこで、パーソナリティの特徴を網羅した尺度によって出来事との関連を明らかにする。第3に、日常的な出来事の中で、生起するむなしさを検討する。対象喪失のような、重大な出来事でむなしさが生じることは想像に難しくない。しかしながら、日常生活場面のなかでも、むなしさが生じると考えられる。これが、心身の健康を左右することも先行研究が示している。そこで、日常的出来事によって生起するむなしさについて分析を行う。第4に、パーソナリティから日常的出来事を介してむなしさに及ぼす影響を検討する。感情はある出来事を経験して生じるものである。つまり、日常的な出来事を経験したのちにむなしさを感じると考えられる。むなしさが高い状態になるかどうかは、パーソナリティによる出来事への評価が関係していると考えられ、パーソナリティによって

出来事を介することでむなしさを感じやすい、感じにくいがあるのではないかと思われる。本研究では、以上の4点について検討する。

方法

調査対象者

日本の大学生、大学院生 148名(男性 39名, 女性 109名, 平均年齢 = 21.142, 標準偏差 = 1.598)を対象とした。

調査手続き

2020年11月から12月にオンラインによる同期型授業の中で Google フォームによる質問紙調査を行った。さらに縁故法を用いて、質問紙への回答も依頼した。

倫理的配慮

倫理的配慮として、回答はコンピューターによって統計的に処理され、本研究の目的にのみ使用することや、個人情報が増える心配がないことを質問紙に記載した。そのうえで同意いただけた方には回答に進んでもらうよう設定をした。

質問紙の構成

(1) **むなしさを測定する尺度** むなしさを測定するために、徳本(2001)が作成した「空虚感尺度」を使用した。「自己不確実・自己不安定感因子」, 「充実感喪失因子」からなる2因子15項目である。そう思う・少しそう思う・あまり思わない・思わないの4件法であった。得点が高いほど、むなしさを強く感じているといえる。

(2) **大学生の日常的出来事を測定する尺度** 外山・桜井(1999)が作成した大学生用「日常的出来事尺度」を使用した。「自己に関するネガティブな出来事」, 「対人関係に関するネガティブな出来事」, 「大学生活に関するネガティブな出来事」, 「私生活に関するネガティブな出来事」, 「自己に関するポジティブな出来事」, 「対人関係に関するポジティブな出来事」からなる6因子40項目の尺度である。このうち、ネガティブな出来事、ポジティブな出来事の因子数をそろえるため、「自己に関するネガティブな出来事」, 「対人関係に関するネガティブな出来事」, 「自己に関するポジティブな出来事」, 「対人関係に関するポジティブな出来事」の4因子32項目を使用することにした。また、本尺度は体験の頻度を5段階(全然なかったーよくあった), その経験の嫌悪性または良好性を7段階(非常に嫌だったー非常に良かった)で評価するように求めている。しかしながら、本研究では、回答者の負担を考え、体験の有無および、体験の快不快(体験なし(0点), とても嫌だった(1点), 少し嫌だった(2点), どちらともいえない(3点), 少し良かった(4点), とてもよかった(5点))を5段階で評価するよう求めた。体験の快不快については、経験のあったものに対してのみ回答を求めた。

(3) **パーソナリティを測定する尺度** パーソナリティを測定するために、並川・谷・脇田・熊谷・中根・野口(2012)が作成した「Big Five 尺度短縮版」を使用した。「開放性」, 「外向

性」,「誠実性」,「情緒不安定性」,「調和性」の5因子29項目からなる。本尺度では,オリジナル版にならい7件法(非常に当てはまる—まったく当てはまらない)で回答を求めている。しかしながら,並川ら(2012)は,5件法による回答が望ましいのではないかという指摘をしており,回答者の負担も考え,本研究では5件法(当てはまる—当てはまらない)で回答を求めた。

(4)対象者に対する質問項目 学年,年齢,性別について尋ねた。

結果

まず,使用尺度の項目とその記述統計について表1,2,3に示す。

表1 空虚感尺度 記述統計

項目	平均	SD
自分にも何かとりえがあると思っている	2.939	0.949
不安になることがよくある	3.264	0.950
生活に充実感に満ちた楽しさがある	2.696	0.967
悩んだり、迷ったりすることが多い	3.331	0.836
自分ではどうしていいかわからないと思うことがよくある	3.074	0.934
自分つまらない人間だと感じることもある	2.845	1.022
投げやりな気持ちになることが多い	2.784	0.973
私は生きがいのある生活をしている	2.682	0.889
自分はいつも損ばかりしている	1.932	0.909
自分の周りにベールがかかったような感じがある	1.851	0.957
何かをやり終えたとき、結果はどうであれ、とにかくやったという実感をもてる	2.960	0.887
やる気がしないことが多い	2.987	0.940
しらけた感じになることがよくある	2.189	0.957
心がうつろに感じられる時がある	2.534	1.040
毎日の生活にはりがある	2.230	0.858

表2 大学生用日常的出来事尺度 記述統計

項目	平均	SD	項目	平均	SD
授業が楽しかった	3.135	1.451	友人の悩みやトラブルに関 りを持った	1.716	1.773
前から欲しいものが手に入 った	3.568	1.867	将来の職業(選択)について 考えた	2.601	1.603
学業上のこと(試験、レポー トなどで)失敗した	1.453	1.236	自分に対する見方が変わっ た	2.284	1.784
バイトがきつかった	1.365	1.415	クラブやサークルに不満を 持った	0.439	0.920
クラブやサークルでの人間 関係がうまくいかなかった	0.561	1.089	大学生活が楽しかった	3.155	1.741
友人関係がうまくいかなか った	0.960	1.355	自分に自信がなくなった	1.277	1.042
勉強が好きになった	2.061	1.878	太った	1.101	1.239
クラブやサークルが楽しか った	1.554	2.123	褒められた	3.649	1.745
異性関係がうまくいった	1.561	1.953	自分の性格について考えた	2.432	1.625
友人にいいことがあった	3.311	1.941	生活にはりがでた	1.784	1.915
自分に自信が持てた	2.385	1.988	時間にゆとりがあった	2.466	2.035
友人が増えた	1.737	2.123	生活にはりがなかった	1.689	1.282
クラブやサークルが充実し ていた	1.487	2.085	友人関係がうまくいった	3.074	1.990
自己嫌悪に陥った	1.399	1.182	計画が実行できなかった	1.446	1.071
恋人がほしいのにできなか った	0.818	1.235	自分の容姿が気になった	1.669	1.347
自分の能力・適性について考 えた	2.176	1.502	異性の友人と楽しくつきあ えた	2.432	2.077

表3 Big Five 尺度短縮版 記述統計

項目	平均	SD	項目	平均	SD
ルーズな	3.547	1.065	好奇心が強い	3.439	1.045
無口な	2.554	1.065	成り行きまかせ	3.466	1.084
弱気になる	3.601	1.188	緊張しやすい	4.169	1.127
社交的な	3.081	1.053	多才な	2.439	1.089
陽気な	3.270	1.073	進歩的	2.635	0.934
怠惰な	3.878	0.947	寛大な	3.574	1.057
話好きな	3.797	1.010	不安になりやすい	3.926	1.119
親切な	3.642	0.825	独創的な	2.764	1.145
軽率な	3.027	1.100	いい加減な	3.405	1.081
計画性のある	2.676	1.096	頭の回転の速い	2.710	1.096
憂鬱な	3.034	1.317	自己中心的	3.007	1.104
外交的な	2.770	1.037	興味の広い	3.304	1.254
心配性	3.804	1.210	短気	2.662	1.307
几帳面な	2.973	1.125	温和な	3.622	0.958
怒りっぽい	2.554	1.316			

使用尺度の項目内容と信頼性の検討

(1) 空虚感尺度について 初めに、「空虚感尺度」の全項目を含めて R & STAR(田中・中野, 2013)を用いて因子分析を行った。最尤法により因子を抽出した。元の尺度にならない、まず2因子を抽出すると仮定し、分析を進めることにした。バリマクス回転を用いた。図1には、因子の固有値を示すスクリープロットを示す。図1より、2因子以降は傾きが平らになり、固有値の減少の仕方もわずかになっていることがわかる。これより、2因子である可能性が指摘できる。因子負荷量と共通性を確認し、共通性が.01よりも小さかった項目を削除し分析を進めることにした。項目を1つ抜いた14項目で因子分析を行った。最尤法により因子を抽出した。回転は、はじめにバリマクス回転を行っていたが、2つの因子に同程度の負荷量を持った項目も見受けられたためプロマクス回転を用いた。しかしながら、回転を変更しても2つの因子に同程度の負荷量をもった項目があったため、それらを削除し、再度分析にかけた。そうしたところ、2因子12項目が抽出された。2因子による累積寄与率は52.8%であり、半分を超える分散を説明できることが示された。

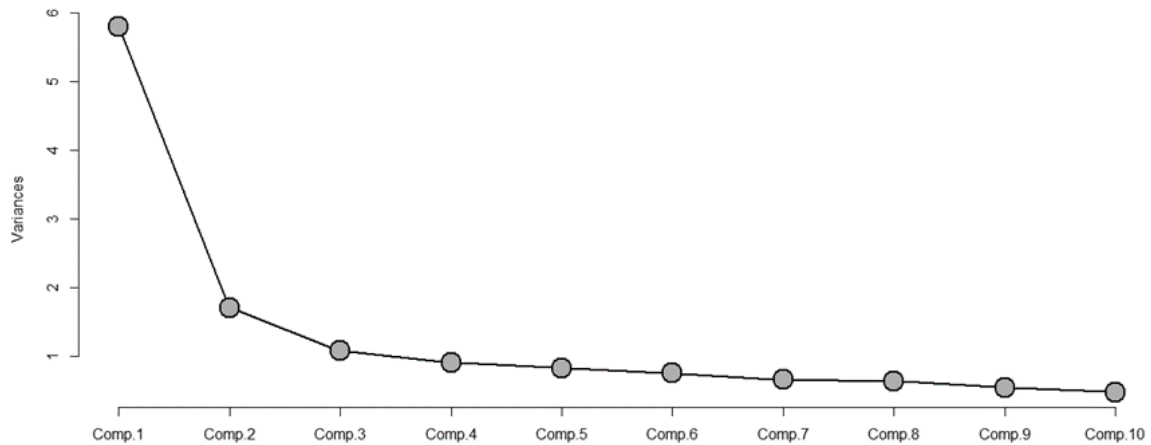


図1 「空虚感尺度」因子のスクリープロット

表4 空虚感尺度 平均, 標準偏差 (SD), α 係数, 因子負荷量

項目	平均	SD	因子負荷量		共通性
			I	II	
充実感・満足感 ($\alpha = .833$)					
私は生きがいのある生活をしている	2.68	0.89	<u>.923</u>	.214	.685
毎日の生活にはりがある	2.23	0.86	<u>.792</u>	.112	.545
生活に充実感に満ちた楽しさがある	2.67	0.97	<u>.706</u>	.097	.434
自分にも何かとりえがあると思っている	2.94	0.95	<u>.620</u>	-.041	.414
しらけた感じになることがよくある (R)	2.19	0.96	<u>-.521</u>	-.013	.264
心がうつろに感じられる時がある (R)	2.53	0.96	<u>-.487</u>	.289	.472
やる気がしないことが多い (R)	2.99	0.94	<u>-.445</u>	.119	.269
自分はいつも損ばかりしている (R)	1.93	0.91	<u>-.400</u>	.155	.250
不安感 ($\alpha = .824$)					
悩んだり、迷ったりすることが多い	2.78	0.97	.196	<u>.898</u>	.656
自分ではどうしていいかわからないと思うことがよくある	3.33	0.84	-.068	<u>.783</u>	.675
不安になることがよくある	3.01	0.93	.002	<u>.742</u>	.549

抽出した因子の内的一貫性を検討するためにクロンバックの α 係数を算出した。その結果、因子1について項目を削除することで、 $\alpha = .743$ から $\alpha = .833$ に数値が大きくなる

ものが見受けられたため削除し、最終的に2因子11項目を採用することにした。

まず、因子1に対して、“私は生きがいのある生活をしている”、“生活にはりがある”、などの項目が高い因子負荷量を示していることから「充実感・満足感」と命名した。次に、因子2に対して、“悩んだり、迷ったりすることが多い”、“自分ではどうしていいかわからないと思うことがよくある”などの項目が高い因子負荷量を示していることから「不安感」と命名した。オリジナルの尺度では、充実感喪失と自己不確実・自己不安定感の因子からなっていることから、充実感・満足感が低く、不安感が高い場合にむなしさが高いと考えられる。表4に最終的に抽出された項目の平均と標準偏差、因子負荷量、各因子のクロンバックの α 係数を示し、表5に因子間相関を示す。

表5 空虚感尺度 因子間相関

	I	II
I		-.538
II		

(2) 大学生用日常的出来事尺度について 次に、大学生用「日常的出来事尺度」の全項目を含めて因子分析を行った。最尤法により因子を抽出した。元の尺度にならば、まず4因子を抽出すると仮定し、分析を進めることにした。バリマクス回転を用いた。図2には、因子の固有値を示すスクリープロットを示す。図2より、4因子以降は傾きが平らになり、固有値の減少の仕方もわずかになっていることがわかる。これより、4因子である可能性が指摘できる。因子負荷量と共通性を確認し、因子負荷量が.35以下の項目を削除し分析を進めることにした。7項目を抜いた25項目で因子分析を行った。最尤法により因子を抽出した。回転は、はじめにバリマクス回転を行っていたが、2つの因子に同程度の負荷量を持った項目も見受けられたため、プロマクス回転を用いた。しかしながら、回転を変更しても2つの因子に同程度の負荷量をもった項目や因子負荷量が.35以下の項目があったため、それらを削除し、因子分析を行うということを繰り返した。その結果、4因子18項目が抽出された。4因子による累積寄与率は51.0%であり、半分を超える分散を説明できることが示された。

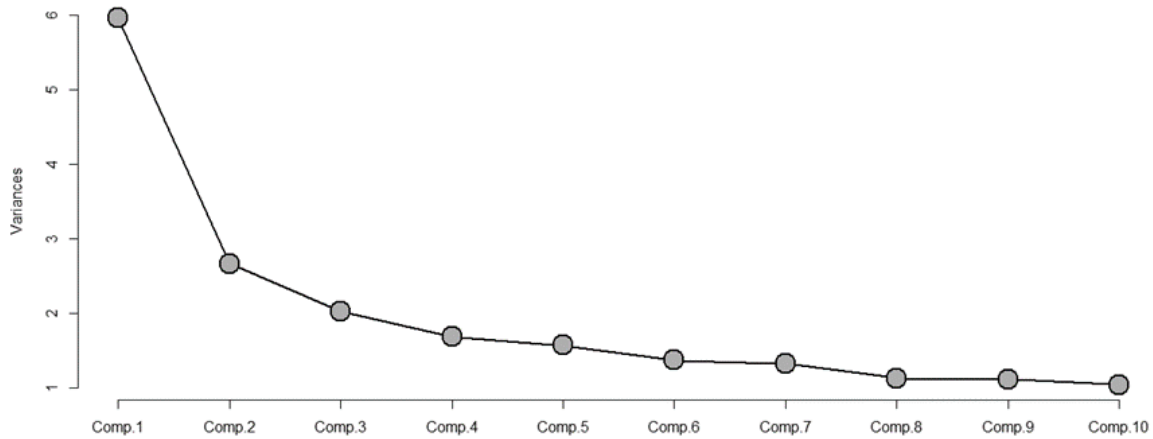


図2 「日常的出来事尺度」 因子のスクリープロット

表6 日常的出来事尺度 平均, 標準偏差(SD), α 係数, 因子負荷量

項目	平均	SD	因子負荷量		共通性
			I	II	
自己に関するポジティブな出来事 ($\alpha = .793$)					
褒められた	3.65	1.75	<u>.701</u>	-.007	.461
友人関係がうまくいった	3.07	1.99	<u>.606</u>	.143	.400
自分に自信が持てた	2.39	1.99	<u>.569</u>	.036	.350
大学生活が楽しかった	3.16	1.74	<u>.567</u>	.098	.307
将来の職業(選択)について考えた	2.60	1.60	<u>.563</u>	-.152	.266
時間にゆとりがあった	2.47	2.04	<u>.460</u>	-.010	.216
異性の友人と楽しくつきあえた	2.43	2.08	<u>.452</u>	.063	.320
生活にはりがでた	1.78	1.92	<u>.452</u>	.082	.388
友人にいいことがあった	3.31	1.94	<u>.446</u>	.020	.204
前から欲しいものが手に入った	3.57	1.87	<u>.376</u>	-.151	.260
クラブやサークルにおけるポジティブな出来事 ($\alpha = .929$)					
クラブやサークルが充実していた	1.49	2.08	.027	<u>1.020</u>	.995
クラブやサークルが楽しかった	1.55	2.12	.092	<u>.871</u>	.765

注: 因子負荷量.35以上のものに下線を引いた。

抽出した因子の内的一貫性を検討するためにクロンバックの α 係数を算出した。その結果、因子2について項目を削除することで、 $\alpha = .807$ から $\alpha = .929$ に数値が大きくなるものが見受けられたため削除した。また、因子3、因子4についてはクロンバックの α 係数がそれぞれ $\alpha = .527$ 、 $\alpha = .523$ と低かったため、信頼性が低いと判断した。最終的に2因子12項目を採用することにした。

まず、因子1に対して、“褒められた”、“友人関係がうまくいった”、などの項目が高い因子負荷量を示していることから「自己に関するポジティブな出来事」と命名した。次に、因子2に対して、“クラブやサークルが充実していた”、“クラブやサークルが楽しかった”などの項目が高い因子負荷量を示していることから「クラブやサークルにおけるポジティブな出来事」と命名した。表6に最終的に抽出された項目の平均と標準偏差、因子負荷量、各因子のクロンバックの α 係数を示し、表7に因子間相関を示す。

表7 日常的出来事尺度 因子間相関

	I	II
I		.273
II		

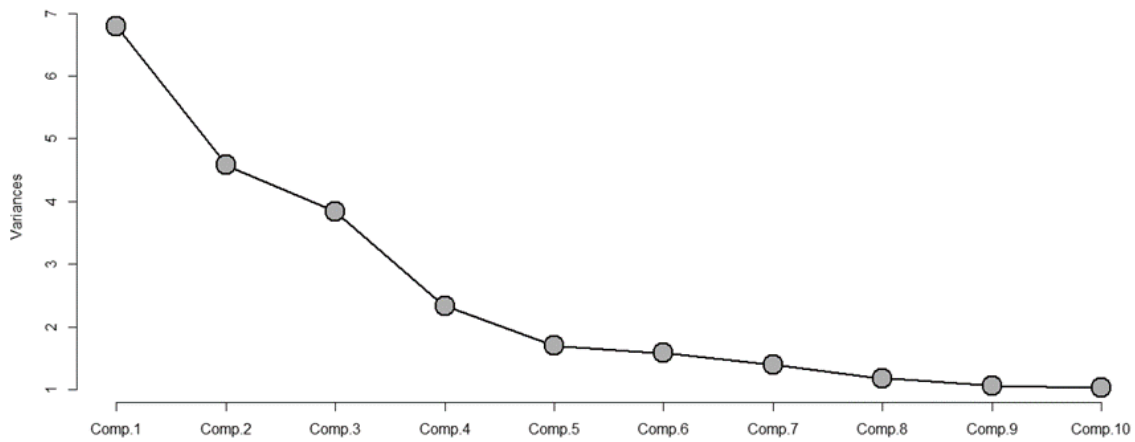


図3 「Big Five 尺度短縮版」 因子のスクリープロット

表8 Big Five 尺度短縮版 平均, 標準偏差(*SD*), α 係数, 因子負荷量

項目	平均	<i>SD</i>	因子負荷量					共通性
			I	II	III	IV	V	
調和性($\alpha=.822$)								
寛大な(R)	2.66	2.20	<u>-.772</u>	.088	.168	.100	.061	.633
短気	3.56	1.06	<u>.709</u>	.124	.109	-.007	.166	.632
怒りっぽい	2.55	1.32	<u>.672</u>	.035	.067	.045	.142	.512
温和な(R)	3.62	0.96	<u>-.630</u>	-.003	.315	-.131	.017	.566
自己中心的	3.01	1.10	<u>.589</u>	.234	.257	.089	.055	.509
親切的な(R)	3.64	0.82	<u>-.457</u>	-.061	.263	.168	.254	.378
誠実性($\alpha=.757$)								
いい加減な	3.41	1.08	.077	<u>.723</u>	-.057	.071	.076	.585
ルーズな	3.55	1.06	.028	<u>.621</u>	.048	-.040	-.082	.401
成り行きまかせ	3.47	1.08	-.125	<u>.566</u>	-.016	.139	-.067	.330
怠惰な	3.88	0.95	.115	<u>.550</u>	-.106	-.223	.036	.446
軽率な	3.03	1.10	.230	<u>.492</u>	.155	-.005	-.081	.362
計画性のある(R)	2.68	1.10	.094	<u>-.478</u>	.108	.139	.090	.254
開放性($\alpha=.744$)								
多才な	2.44	1.09	-.120	-.109	<u>.675</u>	.034	-.068	.556
好奇心が強い	3.44	1.04	.067	.104	<u>.641</u>	.043	-.022	.411
独創的な	2.76	1.15	.009	-.020	<u>.579</u>	-.083	.028	.336
進歩的	2.64	0.93	-.190	-.203	<u>.567</u>	-.086	.042	.480
興味の広い	3.30	1.25	.011	.098	<u>.525</u>	.108	-.025	.303
外向性($\alpha=.803$)								
無口な(R)	2.55	1.06	.051	-.129	.231	<u>-.766</u>	-.040	.599
社交的な	3.08	1.05	-.001	-.175	-.003	<u>.755</u>	-.057	.628
外向的な	2.77	1.04	.061	-.029	.266	<u>.680</u>	-.129	.645
話好きな	3.80	1.01	.024	.130	.011	<u>.526</u>	.084	.278
陽気な	3.27	1.07	.034	.027	.200	<u>.513</u>	-.274	.489
情緒不安定性($\alpha=.852$)								
不安になりやすい	3.93	1.12	-.079	.061	-.053	.059	<u>.935</u>	.822
心配性	3.60	1.19	.164	-.252	.025	.030	<u>.760</u>	.689
弱気になる	3.80	1.21	.036	.071	.054	-.181	<u>.728</u>	.655
憂鬱な	3.03	1.32	.104	.017	.051	-.210	<u>.539</u>	.437
緊張しやすい	4.17	1.10	.088	.043	-.077	-.155	<u>.512</u>	.381

注：因子負荷量.40以上のものに下線を引いた。

(R)は反転項目

表9 Big Five 尺度短縮版 因子間相関

	I	II	III	IV	V
I		.216	-.304	-.040	-.023
II			-.044	-.183	.316
III				.131	.010
IV					-.107

Big Five 尺度短縮版について 次に、Big Five 尺度短縮版の全項目を含めて因子分析を行った。重みづけ最小二乗法により因子を抽出した。元の尺度にならない、まず5因子を抽出すると仮定し、分析を進めることにした。直接オブリミン回転を用いた。図3には、因子の固有値を示すスクリープロットを示す。図3より、5因子以降は傾きが平らになり、固有値の減少の仕方もわずかになっていることがわかる。これより、5因子である可能性が指摘できる。因子負荷量と共通性を確認し、因子負荷量が.40以下の項目と2つの因子に同程度の負荷量をもった項目を削除し分析を進めることにした。2項目を抜いた27項目で因子分析を行った。重みづけ最小二乗法、直接オブリミン回転により因子を抽出したその結果、5因子27項目が抽出された。5因子による累積寄与率は58.1%であり、半分を超える分散を説明できることが示された。

抽出した因子の内的一貫性を検討するためにクロンバックの α 係数を算出したところ $\alpha = .744-.852$ と十分な数値が得られた。元の尺度をもとに、因子1は、“寛大な”、“短気”などの項目からなるため「調和性」と命名した。因子2に対して、“いい加減な”、“ルーズな”などの項目からなるため「誠実性」と命名した。因子3は、“多才な”、“好奇心が強い”などの項目からなるため「開放性」と命名した。因子4は、“無口な”、“社交的な”などの項目からなるため「外向性」と命名した。因子5は、“不安になりやすい”、“心配性”などの項目からなるため「情緒不安定性」と命名した。表8に最終的に抽出された項目の平均と標準偏差、因子負荷量、各因子のクロンバックの α 係数を示し、表9に因子間相関を示す。

各変数の記述統計については表10に示す。

表 10 各変数の記述統計

変数名	平均	SD	歪度	尖度
充実感・満足感	2.613	0.638	-0.193	-0.315
不安感	3.223	0.781	-0.791	-0.280
自己に関するポジティブな出来事	2.843	1.120	-0.399	-0.658
クラブやサークルにおけるポジティブな出来事	1.520	2.033	0.787	-1.159
調和性	2.605	0.890	0.417	-0.334
誠実性	3.441	0.714	0.035	-0.562
開放性	2.916	0.772	0.145	0.058
外向性	3.142	0.838	0.124	-0.693
情緒不安定性	3.707	0.947	-0.645	-0.373

表 11 各変数の相関行列

	情緒不安定性	調和性	外向性	誠実性	開放性	充実感・満足感	不安感	自己に関するポジティブな出来事	クラブやサークルにおけるポジティブな出来事
情緒不安定性		.266**	-.420**	-.023	-.077	-.484**	.795**	-.219**	-.200 *
調和性			-.052	.357**	-.250**	-.357**	.175*	-.301**	-.112
外向性				.007	.172*	.359**	-.317**	.191*	.186*
誠実性					-.144 †	-.148 †	-.001	-.183*	-.069
開放性						.380**	-.032	.213**	.191*
充実感・満足感							-.441**	.513**	.266**
不安感								-.133	-.150 †
自己に関するポジティブな出来事									.282**
クラブやサークルにおけるポジティブな出来事									

注： † p<.10, *p<.05, **p<.01

各変数の関連性の検討

(1) **相関の検討** 各変数にどのような関連性があるのかを検討するために R & STAR(田中・中野, 2013)を用いて相関分析を行った。相関行列を表 11 に示す。ほとんどの変数間に有意差がみられた。充実感・満足感とは、すべての変数が有意または有意傾向を示した。不安感とは、情緒不安定性、調和性、誠実性と有意差が見られた。

(2) **むなしさを高める要因の探索** 次に、むなしさを高める要因を探索するために、充実感・満足感を目的変数、パーソナリティに関する変数 5 つと出来事に関する変数 2 つを説明変数として重回帰分析を行った(項目 1: 情緒不安定性, 項目 2: 調和性, 項目 3: 外向性, 項目 4: 誠実性, 項目 5: 開放性, 項目 6: 自己に関するポジティブな出来事, 項目 7: クラブやサークルにおけるポジティブな出来事)。初期モデルを加法モデルとし、ステップワイズ増減法により情報量基準 *BIC* を用いたモデル選択の結果、“充実感・満足感=項目 1+項目 5+項目 6” を選出した。その要約を表 12 に示す。

表 12 モデル選択ステップの要約

Step	項の増減	<i>df</i>	残差増分	<i>df</i>	残差逸脱度	<i>BIC</i>
1		-	-	140	30.052	226.03
2	-項目 4	1	0.0308	141	30.083	221.18
3	-項目 7	1	0.0553	142	30.138	216.46
4	-項目 2	1	0.5455	143	30.684	214.12
5	-項目 3	1	0.4936	144	31.177	211.48

選出されたモデルにおける各項目の偏回帰係数とその検定結果は表 13 のとおりである。

表 13 偏回帰係数の決定

	偏回帰係数	標準誤差	<i>t</i> 値	<i>p</i> 値	<i>stb</i>
(切片)	2.313	0.244	9.480	$p < .001$	-
項目 1	-0.258	0.042	-6.197	$p < .001$	-0.382
項目 5	0.225	0.051	4.413	$p < .001$	0.272
項目 6	0.212	0.036	5.912	$p < .001$	0.372

モデル R^2 は 0.479 で有意だった($F(3,144) = 44.19, p < .001, effect\ size\ f^2 = 0.920, adjusted\ R^2 = 0.469$)。したがって、充実感・満足感は項目 1, 項目 5, 項目 6 で説明されるといえる。多重共線性の問題はなかった。

特に、項目1がマイナスの係数を示していることが注目される。情緒不安定性のパーソナリティをもっていると、充実感・満足感が下がることが示唆される。また、表13の標準化偏回帰係数(*stb*)を比べると、どの項目も同程度充実感・満足感に影響を及ぼしていることがわかる。つまり、パーソナリティだけではなく、出来事それ自体によって充実感・満足感が変化するということが考えられる。

続けて、不安感を目的変数、パーソナリティに関する変数5つと出来事に関する変数2つを説明変数として重回帰分析を行った(項目1:情緒不安定性, 項目2:調和性, 項目3:外向性, 項目4:誠実性, 項目5:開放性, 項目6:自己に関するポジティブな出来事, 項目7:クラブやサークルにおけるポジティブな出来事)。初期モデルを加法モデルとし、ステップワイズ増減法により情報量基準 *BIC* を用いたモデル選択を行った結果、“不安感=項目1”を選出した。モデル選択ステップの要約を表14に示す。

表14 モデル選択ステップの要約

Step	項の増減	df	残差増分	df	残差逸脱度	<i>BIC</i>
1		-	-	140	32.585	238.01
2	-項目7	1	0.0007	141	32.586	233.01
3	-項目3	1	0.0195	142	32.605	228.10
4	-項目5	1	0.0292	143	32.634	223.24
5	-項目4	1	0.1238	144	32.758	218.80
6	-項目2	1	0.0667	145	32.825	214.10
7	-項目6	1	0.1591	146	32.984	209.82

選出されたモデルにおける各項目の偏回帰係数とその検定結果は表15のとおりである。

表15 偏回帰係数の決定

	偏回帰係数	標準誤差	<i>t</i> 値	<i>p</i> 値	<i>stb</i>
(切片)	0.7916	0.1584	4.9987	<i>p</i> < .001	-
項目1	0.6560	0.0414	15.8440	<i>p</i> < .001	0.7952

モデル R^2 は0.632で有意だった($F(1,146)=251.03, p<.001, effect\ size\ f^2=1.720, adjusted\ R^2=0.630$)。したがって、不安感の大部分を項目1で説明されるといえる。多重共線性の問題はなかった。情緒不安定性のパーソナリティをもっていると、不安感が上がることが示唆される。偏回帰係数の値も大きく、強い影響を与えていることがわかる。

(3) 出来事の快不快を決定する要因の探索 出来事の快不快を決定する要因を探索するた

め、自己に関するポジティブな出来事を目的変数、パーソナリティに関する変数 5 つを説明変数として重回帰分析を行った(項目 1 : 情緒不安定性, 項目 2 : 調和性, 項目 3 : 外向性, 項目 4 : 誠実性, 項目 5 : 開放性)。

初期モデルを加法モデルとし、ステップワイズ増減法により情報量基準 *BIC* を用いたモデル選択を行った結果、“自己に関するポジティブな=項目 2+項目 3” を選出した。モデル選択ステップの要約を表 16 に示す。

表 16 モデル選択ステップの要約

Step	項の増減	df	残差増分	df	残差逸脱度	BIC
1		-	-	142	156.84	460.58
2	-項目 4	1	1.4979	143	158.34	456.98
3	-項目 1	1	1.3316	144	159.67	453.23
4	-項目 5	1	2.4212	145	162.09	450.46

選出されたモデルにおける各項目の偏回帰係数とその検定結果は表 17 のとおりである。

表 17 偏回帰係数の検定

	偏回帰係数	標準誤差	t値	p値	stb
(切片)	3.0604	0.4779	6.4038	$p < .001$	-
項目 2	-0.4055	0.1083	-3.7433	0.0003	-0.2918
項目 3	0.2511	0.1114	2.2534	0.0257	0.1757

モデル R^2 は 0.121 で有意だった($F(2,145) = 10.015, p < .001, effect\ size\ f^2 = 0.138, adjusted\ R^2 = 0.109$)。しかしながら、自己に関するポジティブな出来事は項目 2, 項目 3 で説明される値は小さかった。多重共線性の問題はなかった。

項目 2 がマイナスの係数を示していることが注目される。調和性のパーソナリティをもっていると、自己に関するポジティブな出来事が下がることが示唆される。調和性は、短気などの項目からなるため、周囲に対し挑戦的である可能性があり、快だと評価することが少ないのではないかと考えられる。また、表 17 の標準化偏回帰係数(stb)を比べると、どの項目も同程度影響を及ぼしていることがわかる。

続けて、クラブやサークルにおけるポジティブな出来事を目的変数、パーソナリティに関する変数 5 つを説明変数として重回帰分析を行った(項目 1 : 情緒不安定性, 項目 2 : 調和性, 項目 3 : 外向性, 項目 4 : 誠実性, 項目 5 : 開放性)。

初期モデルを加法モデルとし、ステップワイズ増減法により情報量基準 *BIC* を用いたモデル選択を行った結果、“クラブやサークルにおけるポジティブな出来事=項目 1” を選出した。モデル選択ステップの要約を表 18 に示す。

表 18 モデル選択ステップの要約

Step	項の増減	<i>df</i>	残差増分	<i>df</i>	残差逸脱度	<i>BIC</i>
1		-	-	142	558.16	648.45
2	-項目 2	1	0.0865	143	558.24	643.47
3	-項目 4	1	1.5167	144	559.76	638.88
4	-項目 3	1	4.5336	145	564.30	635.08
5	-項目 5	1	18.7332	146	583.03	634.91

選出されたモデルにおける各項目の偏回帰係数とその検定結果は表 19 のとおりである。

表 19 偏回帰係数の検定

	偏回帰係数	標準誤差	<i>t</i> 値	<i>p</i> 値	<i>stb</i>
(切片)	3.1156	0.6658	4.6793	$p < .001$	-
項目 1	-0.4304	0.1741	-2.4724	0.0146	-0.2005

モデル R^2 は 0.040 で有意だった ($F(1,146) = 6.113$, $p = .014$, *effect size* $f^2 = 0.042$, *adjusted R*² = 0.034)。しかしながら、項目 1 のモデルで説明されるクラブやサークルにおけるポジティブな出来事はほとんどないということだった。多重共線性の問題はなかった。

項目 1 がマイナスの係数を示していることが注目される。情緒不安定性のパーソナリティをもっていると、クラブやサークルにおけるポジティブな出来事が下がることが示唆される。クラブやサークルでの活動が、不安感や緊張感を高める可能性があると考えられる。また、表 19 の標準化偏回帰係数(*stb*)を比べると、どの項目も同程度影響を及ぼしていることがわかる。

充実感・満足感と不安感の高低におけるパーソナリティと出来事の得点の検討

充実感・満足感が低く、不安感が高いものはむなしさが高い状態なのではないかと考えられる。そこで充実感・満足感の高低と不安感の高低においてパーソナリティと出来事の変数の尺度得点が異なるのかを検討するために 2 要因分散分析を行った。充実感・満足感の「高い」「低い」の 2 水準と、不安感が「高い」「低い」の 2 水準で行った。表 20 に充実感・満足感と不安感の高低における人数および平均値と標準偏差を示す。

表 20 充実感・満足感と不安感の高低における人数の記述統計

	充実感・満足感 高+不安感高 (N=34)			充実感・満足感 高+不安感低 (N=47)			充実感・満足感 低+不安感高 (N=50)			充実感・満足感 低+不安感低 (N=17)		
	満足感	充実感	不安感	満足感	充実感	不安感	満足感	充実感	不安感	満足感	充実感	不安感
平均	2.989	3.784	1.985	3.813	3.146	2.362	2.235	2.745				
SD	0.308	0.279	0.416	0.242	0.384	0.558	0.218	0.388				

(1)情緒不安定性について 分散分析の結果、交互作用は有意ではなく($F(1,144)=0.306$, $p=0.581$, $partial \eta^2=0.002$), 充実感・満足感の高低の主効果が有意であり($F(1,144)=10.552$, $p=0.001$, $partial \eta^2=0.068$, $power=0.905$), また、不安感の高低の主効果も有意だった($F(1,144)=83.715$, $p<.001$, $partial \eta^2=0.368$, $power=1.000$)。

(2)調和性について 分散分析の結果、交互作用は有意ではなく($F(1,144)=0.306$, $p=0.581$, $partial \eta^2=0.002$), 充実感・満足感の高低の主効果が有意であり($F(1,144)=10.552$, $p=0.001$, $partial \eta^2=0.068$, $power=0.905$), また、不安感の高低の主効果も有意だった($F(1,144)=83.715$, $p<.001$, $partial \eta^2=0.368$, $power=1.000$)。

(3)外向性について 分散分析の結果、交互作用は有意ではなく($F(1,144)=1.787$, $p=0.184$, $partial \eta^2=0.012$), 充実感・満足感の高低の主効果が有意であったが($F(1,144)=11.971$, $p=0.001$, $partial \eta^2=0.077$, $power=0.936$), 不安感の高低の主効果は有意ではなかった($F(1,144)=1.275$, $p=0.261$, $partial \eta^2=0.009$, $power=0.206$)。

(4)誠実性について 分散分析の結果、交互作用は有意ではなく($F(1,144)=0.000$, $p=0.998$, $partial \eta^2=0.000$), 充実感・満足感の高低の主効果も不安の高低も有意ではなかった($F(1,144)=0.254$, $p=0.615$, $partial \eta^2=0.002$, $power=0.080$) ($F(1,144)=0.119$, $p=0.731$, $partial \eta^2=0.001$, $power=0.064$)。

(5)開放性について 分散分析の結果、交互作用は有意ではなく($F(1,144)=1.701$, $p=0.194$, $partial \eta^2=0.012$), 充実感・満足感の高低の主効果が有意であったが($F(1,144)=6.514$, $p=0.012$, $partial \eta^2=0.043$, $power=0.729$), 不安感の高低の主効果は有意ではなかった($F(1,144)=0.001$, $p=0.922$, $partial \eta^2=0.000$, $power=0.051$)。

(6)自己に関するポジティブな出来事について 分散分析の結果、交互作用は有意ではなく($F(1,144)=0.261$, $p=0.610$, $partial \eta^2=0.002$), 充実感・満足感の高低の主効果が有意であったが($F(1,144)=23.467$, $p<.001$, $partial \eta^2=0.140$, $power=0.998$), 不安感の高低の主効果は有意ではなかった($F(1,144)=0.074$, $p=0.786$, $partial \eta^2=0.001$, $power$

= 0.059)。

(7)クラブやサークルに関するポジティブな出来事について 分散分析の結果、交互作用は有意ではなく($F(1,144)=0.000, p=0.985, \text{partial } \eta^2=0.000$)、充実感・満足感の高低の主効果が有意であったが($F(1,144)=15.996, p<.001, \text{partial } \eta^2=0.100, \text{power}=0.981$)、不安感の高低の主効果は有意ではなかった($F(1,144)=0.186, p=0.667, \text{partial } \eta^2=0.001, \text{power}=0.072$)。

以上の結果から、すべての従属変数における交互作用は有意ではなかった。充実感・満足感についてはすべての従属変数に対し主効果が有意であった。不安感、情緒不安定性、調和性において主効果が有意であった。

パーソナリティが日常的出来事を介してむなしさに及ぼす影響の検討

感情の生起には出来事による経験が必要であると考えられるため、パーソナリティが日常的出来事を介してむなしさに及ぼす影響を検討することとした。HAD(清水, 2016)を用いて仮説に基づきモデルを検討した。調和性、外向性、誠実性、開放性、情緒不安定性を独立変数、満足感・充実感と不安感を従属変数、自己に関するポジティブな出来事とクラブやサークルにおけるポジティブな出来事を媒介変数としたパス図を作成した。また、重回帰分析の結果から開放性は充実感・満足感、情緒不安定性は充実感・満足感と不安感に直接的な影響を及ぼしていると考えられるため、直接的なパスも引き共分散構造分析を行った(図4)。その結果、調和性から自己に関するポジティブな出来事へのパス、開放性から満足感・充実感へのパス、情緒不安定性から満足感・充実感と不安感へのパス、自己に関するポジティブな出来事から充実感・満足感へのパスが有意であった。開放性から自己に関するポジティブな出来事、クラブやサークルにおけるポジティブな出来事へのパスは有意傾向であった。モデルの適合度に関して、 $\chi^2=13.486, p=.096, CFI=.984, RMSEA=.068, BIC=198.383$ であった。 χ^2 は有意でなく、 CFI は基準値の0.9を上回っており、また $RMSEA$ は 0.05 以下ではないが 0.1 以上ではないため適合度はおおむね良好であると判断し、このモデルを採用することにした。結果を図5に示す。

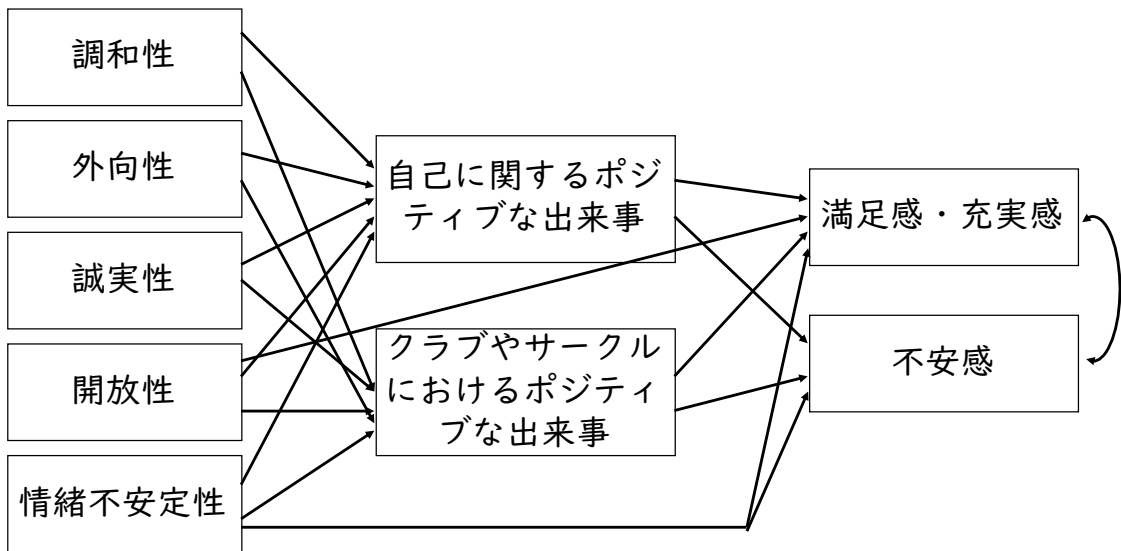


図4 仮定したモデル(誤差は省略)

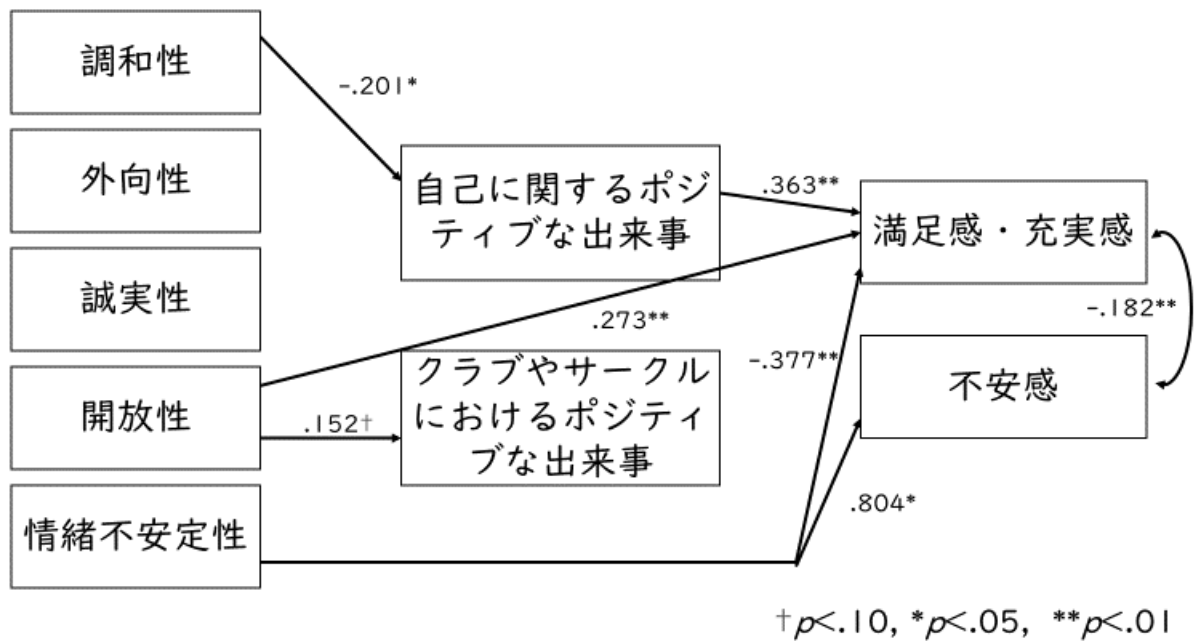


図5 最終的なモデル(誤差は省略, 有意なパスのみ表記)

考察

パーソナリティとむなしさとの関連

本研究では、むなしさに関連するパーソナリティの特徴について検討した。その結果、充実感・満足感では、情緒不安定性が高くなると充実感・満足感が下がり、開放性が高くなると充実感・満足感が高くなることが示された。また、不安感では、情緒不安定性と正の関連があることが示された。つまり、情緒不安定性が上がると、充実感・満足感が下がり、不安感が上がるということである。本研究では、むなしさを「人生に目的や目標を見出せず、自己像が不確実になっている感覚」と定義している。充実感・満足感が低く、不安感が高い状態は、この定義の要素を満たしていると考えられ、むなしさが高い状態であるといえる。本研究では、情緒不安定性がむなしさに関連の高いパーソナリティであるということが示唆された。

むなしさについて、論じている研究は国内では極めて少ない。その中で、精神分析の立場から、北山(1992)がむなしさの特徴や機能について論じている。北山(1992)によれば、むなしさとは空虚で何もなく、満たされていない状態である。つまり、むなしさを軽減するにはそれを満たす出来事や感情が必要となる。例えば、充実感や満足感のような感情で満たされるとむなしさは低下するだろう。よって、むなしさが抑うつや不安と関連する場合、むなしさを満たす出来事や感情が得られることによって、結果的に抑うつや不安も低下させることが可能であると考えられる。また、浮田(2018)は、森田正馬を例に挙げ、共に直視してくれる知人とともに外界の対象喪失を直視したからこそ精神内界の病理的むなしさにまで陥らず、息子の死について乗り越えることができたのではないかと述べている。つまり、むなしさを軽減するには「あるがまま」を肯定することも必要なのではないかとされる。そして、それを促進するためにも友人といったサポートが有効と考えられる。先行研究によると、損害回避特性が高い中学生は抑うつが高いことが示されている(田中, 2006)。損害回避特性とは、何かしなくてはならないと思うとすぐく心配になるなどの項目内容であり、心配や不安から行動が抑制されていると考えられる。つまり、不安や心配などから抑うつが高まる可能性が考えられ、不安を感じやすいパーソナリティである情緒不安定性と抑うつは関連が高いことが示唆される。また、空虚感が抑うつと関係があることも分かっている(Hazell, 1984a, 1984b)。ここから、情緒不安定性とむなしさの関連が見いだされたのも理解できる。しかしながら、2 要因分散分析において交互作用は見られなかったため、充実感・満足感が低く、不安感が高い状態(むなしさが高い状態)が情緒不安定性と関連があるというのは示唆にとどまる。また、開放性のみ充実感・満足感と正の関連が生じている。開放性は、新しいことに対する意欲が高く、自分の能力について理解している特徴を持っていることが想像できる。この特徴は自分への自信にもつながっていることが想像でき、そのために充実感や満足感が高くなると示唆される。

本研究では、いくつかの特性とむなしさとの関連が見られなかった。例えば、外向性が

高い場合、対人交流などエネルギーに満ちている人が想像でき、充実感・満足感と関係があることを想像することは容易い。しかしながら、外向性と充実感・満足感には中程度の正の相関はあるが、因果関係は見られなかった。つまり、外向性の高さが誰にとっても充実感・満足感につながるわけではないということが示唆された。

パーソナリティと日常的出来事との関連

先行研究においても、出来事に対する評価とパーソナリティとの関連を検討している。しかしながらそれは、外向性と神経症的傾向との関連であり、**Big Five**のようなパーソナリティを網羅したものととの関連を検討したものではない。本研究では、調和性が低くなると、自己に関するポジティブな出来事の評価が上がることで、外向性が高まると自己に関するポジティブな出来事の評価が上がることを示された。門田・寺崎(2009)では、外向的な人ほど対人的な出来事を快と評価していることが示されている。自己に関するポジティブな出来事の中には、対人関係の出来事も含まれており、先行研究と一致しているといえる。調和性に対しては、短気や怒りっぽいという項目内容からも、ポジティブなことが起きるまでの過程がストレスとなっているため、そこまで快と評価しない可能性や、そもそもこういったポジティブな出来事を体験するということが少ない可能性が考えられる。外山・桜井(1999)では、ポジティブな出来事が不機嫌・怒り感情や不安・抑うつ感情といった情動的ストレス反応を軽減することが分かっている。つまり、ポジティブな出来事が調和性の怒り感情などを軽減した可能性も考えられる。

また、クラブやサークルにおけるポジティブな出来事については、情緒不安定性が負の関連があった。パーソナリティ特性が心的ストレス過程と関連していることが明らかになっており(尾関・原口・津田, 1991)、情緒不安定性のパーソナリティにおいても、クラブやサークルでの活動はストレスだと評価された可能性もある。自己に関するポジティブな出来事で、同じような関連が見受けられなかったのは、集団か個人かなどほかの要因が関係していた可能性が考えられる。

また、本研究では関連が見いだせなかった特性があった。先行研究において、神経症的傾向を持つ人は出来事の評定ではなく、頻度と関連があることがわかっている(門田・寺崎, 2009)。本研究においても、評価ではなく、出来事の頻度が関係していた可能性が示唆され、今後、頻度との検討もしていく必要がある。

日常的出来事とむなしさの関連

日常的な出来事の中で生起するむなしさとの関連を検討した。本研究では、自己に関するポジティブな出来事のみ、充実感・満足感に影響を及ぼしていることが示された。三浦・原岡(2002)では、中高生において受容的なつながりが高い人は、低い人に比べて、孤独感・空虚感・圧迫感・無力感が低く、自尊心・充実感が高いことが見いだされた。つまり、ほめられたことや、対人関係がうまくいったなどの自己に関するポジティブな出来事を通して、自分が受け入れられたと感じたことで、他者とのつながりを感じ、充実感・満足感を

高めたと考えられる。

パーソナリティが日常的出来事を介してむなしさに及ぼす影響

調和性は自己に関するポジティブな出来事を介して満足感・充実感に影響を及ぼすことが示された。しかしながら、満足感・充実感への直接的な影響は示されなかった。つまり、パーソナリティそれ自体の影響は関係なく、出来事の経験を介することが関係しているということである。調和性は競争的で利己的な特徴があり、自己に関するポジティブな出来事が生じたとしても、他者との交流に不信感や警戒を抱いたり、自分に対するもともとの満足感の高さから日常的出来事の評価が下がったりして、結果として満足感・充実感につながらない可能性が示唆される。また、間接効果は-.068であり影響はとても小さいといえる。

開放性と情緒不安定性から満足感・充実感へ直接的に影響があること、情緒不安定性から不安感に直接的に影響があることが示された。出来事を介しての影響が見られなかった要因として、出来事の内容がポジティブなものに限られていることが考えられる。一般的にむなしさは喪失体験といったネガティブと捉えられる出来事から生じるとされている。そのため、ポジティブな出来事を介した間接的な効果を示さなかったと考えられる。特に情緒不安定性は満足感・充実感と不安感への直接的な影響が大きく、経験との影響を詳しく検討する必要がある。今後の研究では、出来事の種類を増やし再検討することでより有益な知見を得ることができると考える。

以上、本研究では、パーソナリティと日常的出来事がむなしさに及ぼす影響について明らかにした。情緒不安定性のパーソナリティがむなしさの高さと関係があることが示唆された。また、パーソナリティ特性によって、体験した日常的出来事の評価が変わる可能性があること、体験した日常的出来事がむなしさに影響を及ぼしている可能性がみられた。本研究の意義として、むなしさを精神的問題の前駆状態として考えること、そしてむなしさを満たすことが予防につながることをあげられる。

むなしさが抑うつを考えるための手がかりとなること(北山, 1992)や抑うつとの高い関連がある(Hazell, 1984a, 1984b)ことが先行研究から分かっている。つまり、むなしさを満たすということが抑うつ症状の予防につながると考えられる。加えて、長期的な空虚感が精神医学的な問題につながる可能性も指摘されており、むなしさを精神的問題の前兆ととらえることができる。

大学生を対象にした研究において、抑うつと不安の低減に対してソーシャルサポートが有効に作用することが明らかになっている(片受, 2016)。また、震災での対象喪失場面において、ソーシャルサポートの大きい人の方が、心身の健康の高いことが分かっている(池内・藤原, 2000)。このような先行研究から、むなしさを満たす方略の1つとして、ソーシャルサポートが有用であると考えられる。

今後の課題

今回、むなしさについて検討するために空虚感尺度を使用した。しかしながら、むなしさの定義についてはまだあいまいな状況であるため、むなしさを検討するにおいて、要素が不足していた可能性がある。また、因子決定の際に「自分つまらない人間だと感じることもある」、「投げやりな気持ちになることが多い」、「自分の周りにベールがかかったような感じがある」、「何かをやり終えたとき、結果はどうであれ、とにかくやったという実感をもてる」の4項目が削除されており、本研究の被験者がそもそもむなしさを感じていたのかということに疑問が残る。そのため、むなしさについての概念をさらに検討し、むなしさ尺度を作成するのが望ましいと考えられる。

本研究では、日常的な出来事について検討をしたが、因子分析の段階で、ネガティブな出来事が除外されてしまった。この尺度はもともと、大学生が一般的に生じている出来事から作られているが、本研究では体験していないとの回答が多く見られた。これには現在の時世が考えられ、4月から生活スタイルが変わってしまった人も多くいると思われる。大学生の場合、授業が対面からオンラインへと変わり、サークルなどの活動も縮小した。これらの影響が今回の研究にも影響したと思われる。そのため、日常的な出来事とむなしさの関連については再度調査を行うことが望ましいと考えられる。

また、本研究の使用変数について妥当性の低さがあげられる。そのため、本研究の結果は示唆にとどまる。再度妥当性を確認したうえで検討する必要がある。

文献

- 馬場安希・菅原健介 (2000). 女子青年における瘦身願望についての研究 教育心理学研究, 48, 267-274.
- Hazell, C. G. (1984a). A scale for measuring experienced levels of emptiness and existential concern *The Journal of Psychology*, 117, 177-182.
- Hazell, C. G. (1984b). Experienced levels of emptiness and existential concern with different levels of emotional development and profile of values *Psychological Report*, 55, 967-976.
- 池内裕美・藤原武弘 (2000). 物的所有物の喪失およびソーシャル・サポート・ネットワークが生活の質(QOL)に及ぼす影響—阪神大震災の被災者を対象として— 社会心理学研究, 16, 92-102.
- 池内裕美・藤原武弘 (2009). 喪失からの心理的回復過程 社会心理学研究, 24, 169-178.
- Taylor, J., & Reeves, M. (2007). Structure of borderline personality disorder symptoms in a nonclinical sample *Journal of Clinical Psychology*, 63, 805-816.
- 門田昌子・寺崎正治 (2009). パーソナリティ, 日常的出来事と主観的幸福感との関連 パーソナリティ研究, 18, 35-45.
- 片受 靖 (2016). 新大学生用ソーシャルサポート尺度と精神的健康, 援助要請スキルの関

- 連についての研究 立正大学心理学研究所紀要, 14, 65-70
- 北山 修 (1992). 空しい 西口 徹(編), imago[イマーゴ]ことばの心理学—日常臨床語辞典 (pp.236-237) 青土社.
- 三浦直樹・原岡一馬 (2002). 中高生における“社会とのつながり”と心理的幸福感の関係 久留米大学心理学研究, 1, 71-78.
- 並川 努・谷 伊織・脇田貴文・熊谷龍一・中根 愛・野口裕之(2012). Big Five 尺度短縮版の開発と信頼性と妥当性の検討 心理学研究, 83, 91-99.
- 新村 出(編)(2008). 広辞苑第六版 岩波書店.
- 日本精神神経学会(監修) (2014). DSM-5 精神疾患の分類と診断の手引き 医学書院.
- 大上真礼 (2013). 「むなしさ」に関する研究の概観と展望 東京大学大学院教育学研究科紀要, 53, 151-156.
- 大上真礼 (2015). 前期高齢者の「むなしさ」の生起・維持プロセス—発達段階での特徴に着目して— 感情心理学研究, 23, 1-11.
- 太田垣洋子・米澤博治文・志和資朗・斎藤 浩・中村 研(2005). 摂食障害患者の自尊感情についての検討 心身医学, 3, 225-231.
- 尾関友佳子・原口雅浩・津田 彰 (1991). 大学生の生活ストレッサー, コーピング, パーソナリティとストレス反応 健康心理学研究, 4, 1-9.
- 白井真理子・鈴木直人 (2016). 6 種類の悲しみ喚起場面における悲しみの特徴および時間的变化 感情心理学研究, 23, 59-67.
- 外山美樹・桜井茂男 (1999). 大学生における日常的出来事と健康状態の関係—ポジティブな日常的出来事の影響を中心に— 教育心理学研究, 47, 374-382.
- 清水裕士 (2016). フリーの統計分析ソフト HAD : 機能の紹介と統計学習・教育, 研究実践における利用方法の提案 メディア・情報・コミュニケーション研究, 1, 59-73.
- 堤 雅雄 (1994). むなしさ—青年期の実存的空虚感に関する発達的研究— 社会心理学研究, 10, 95-103.
- 徳本 祥 (2001). 青年期における空虚感と親からの心理的分離との関連に関する研究 心理臨床学研究, 19, 109-118.
- 高橋奈央・大野あき子・境 泉洋 (2010). 青年の社会的逸脱行為傾向と空虚感・認知的歪曲の関連 徳島大学総合科学部人間科学研究, 18, 59-70.
- 田中麻未 (2006). パーソナリティ特性およびネガティブ・ライフイベントが思春期の抑うつに及ぼす影響 パーソナリティ研究, 14, 149-160.
- 田中 敏・中野博幸 (2013). R & STAR データ分析入門 新曜社.
- 浮田徹嗣 (2018). 空虚感, 精神病理学的現象としての離人感—心理療法の視点から— 横浜市立大学論叢社会科学系列, 70, 125-134.